

# 夫婦関係

Interview

## コロナ離婚の相談が急増中! 問われる夫婦の新しいカタチ

— コロナ禍の前と比較して、離婚相談の件数は増えていきますか？

実は、想像をはるかに超えて増えています。私たちが取り扱っている相談件数で言うと、面談の相談が前年の同時期よりも3割増、電話相談だと5割増です。国の統計では、例年に比べ4〜5月の離婚件数は減っています。ですが、離婚届の提出を土壇場で思いとどまっているだけで、離婚予備軍は増加中というのが現場の実感です。

— コロナ離婚の相談者に際立った特徴はありますか？

まず、20代から30代前半の若年層の相談者が増えました。属性では、これは女性限定ですが、専業主婦が増えています。通常、専業主婦は夫に不満があっても我慢するケースが多いのですが、また、コロナ前の相談は、離婚すべきか決めかねているケースが多かったのですが、今は離婚をあらかじめ決心しているケースが、

男女とも非常に多く見られます。「もういつときでも一緒にいたくない」という感じですね。

理由は、やはり巣こもりによるストレス。妻側なら、テレワークで夫が家にいるストレス。子どもが学校に行かないストレス。さらに自分が出掛けられないストレスのトリプルSです。夫の場合は、それまで帰宅後だけ我慢していたらよかった妻のわがままに堪忍袋の緒が切れるパターンです。

— 夫の定年退職後に起きやすい熟年離婚の前倒しのような？

そう。実は、熟年離婚の一番の引き金は、家にいる夫のためにお昼ご飯を作るといふことなんです。それがテレワークによって、定年退職後と同じことが起きてしまっただ。それでも、熟年夫婦であれば、連れ添った時間もあるし、今さら離婚しても生活が大変という意識が男女共にある。ですが、コロナ離婚を考えるのは主に若い世代なので未来がある。お金の問題じゃない」と、離婚に踏み切るので。東日本大震災のとき、震災離婚でも同じ現象が見られました。自分の生死に関わるような不安な事態に直面すると、「やっぱりこの人じゃない」とこの人と一緒に死にたくない」と思ってしまう。ただ、

震災のときの相談者は被災地周辺に集中していましたが、コロナ禍の方は全国で規模も異なります。

— コロナによって、夫婦の在り方が変わる可能性がありますか？

もし、テレワークが常態化し、夫婦共に自宅で過ごす社会になれば、夫婦関係、在り方も変わっていくと思います。マスクをすることが新たな常識になったように。具体的には、ポジティブな意味での家庭内別居のような新しいライフスタイルが生まれるのでは。例えば、寝室を別にしたリ、それぞれのスペースと時間を自宅で当たり前なものとして持つようになったりするかもしれません。ただし、これは夫婦がよりドライな関係になるという意味ではありません。むしろ、コロナ前の方が、不満があっても関係を維持できました。しかし、四六時中顔を突き合わせる環境では困難です。

たとえ夫婦であっても、性格や価値観、立場が異なるということをお互いに自覚し、その違いを理解して許し合える関係を築くことが、今後、より求められるようになるのではないのでしょうか。その意味では、より深い愛情を育む努力が試されているのだと思います。ダイヤモンド編集部・宮原啓彰



夫婦問題研究家

## 岡野あつこ

Atsuko Okano

おかの・あつこ / 1954年生まれ。76年立命館大学卒業。91年「岡野あつこの離婚相談室」を設立、3万件以上の相談を受ける。離婚カウンセリングの開拓者として著書多数。